

## 序

法学部日吉を支え続けてこられた朝吹亮二先生が、2018年3月をもって定年退職されます。ご着任から34年間にわたり、法学部の発展と教育の充実に多大な貢献をされてきました。ご尽力に感謝の気持ちでいっぱいでありますと同時に、ご退職されるのは寂しい限りであります。

朝吹先生は、慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程を修了された後、1983年に法学部専任講師に就任され、1990年に助教授、1997年に教授へと昇任されています。専任講師を務められていた頃から学習指導副主任を8年お務めになられ、そのあいだに外国語学校の主事もされていました。1999年から学習指導主任を1期2年、続けて日吉主任を4期8年お務めになられました。そのあいだにさまざまな改革を実施されています。ご担当されたフランス語クラスの充実に限らず、幅広い語学の授業の設置、インテンシブコースの修了証付与、地域文化論など教養科目の充実と副専攻認定制度、日吉教員による人文科学・自然科学研究会、など法学部日吉の特色はどれも先生のご尽力によるものです。今でも、申請書などのファイルを開きますと、作成者の欄にAsabuki Ryojiのお名前を目にすることがよくあります。そのたびに、朝吹先生によって実現した制度であることを実感いたします。

朝吹先生は、私が法学部に就職をして初めてお会いした、英語以外の教員の方となります。4月の初めての教授会でした。英語の迫村純男先生に手招きされて行きますと、お隣にいらしたのが長髪の朝吹先生でした。あまりに緊張していたため、ご紹介いただいたときのやりとりを思い出すことはできないのですが、「変わっているんだよ」（もう少しだけけた表現でした）という朝吹先生評と、詩をお書きになるということが強く印象に残りました。法学部には詩人がいらっしやる。そんな素敵な方が教えていらっしやることも新鮮で、憧れとなりました。

先生の最初の詩集『終焉と王国』は1979年に出版されています。その後も『密室論』、『明るい箱』などを刊行され、1987年の『opus』では第25回藤村記念歷程賞を受賞されています。そういったことを知って、詩は苦手を自認しておりましたが、そっと読ませていただきました。難解でありながら、流れていくイメージのように並ぶ言葉の世界に、引き込まれます。ところが、初めてお会いしたその頃にはもう詩をお書きになられていないようでした。大学の要職を歴任され、あまりにお忙しそうな先生が、2008年に再び詩を書かれるようになり、詩人の松浦寿輝氏、作家の川上弘美氏とともに創刊された同人誌『水火』を頂戴したときは、心より嬉しく思いました。

『水火』にはまずその外見の美しさに魅せられます。やわらかい色、紙質、綴じ方（袋とじされているところをペーパーナイフでひらいていきます）、活字の並び。詩だけでなく日記を綴った部分があり、詩的で私的な冊子でもあります。そして、2010年に16年ぶりに詩集『まばゆいばかりの』を発表され、同年に第2回鮎川信夫賞を受賞されました。「作者が抱えている大きな空虚を、ことばのつづれ織りのように描いている」と選者は評しています。一条一条の美しさ、一語一語に込められた情熱という点ではそうであろうと思いつつも、朝吹先生が見つめられているのは、深遠な、でもけっして否定的ではない未来なのでと想像しております。詩人としてまたご活躍されるようになり、これほど嬉しいことはありません。

朝吹先生は詩人であるばかりでなく、研究者としても素晴らしい業績を残されています。アンドレ・ブルトンとシュルレアリスムにご関心を持たれ、とくに、散文の研究が進んでいたブルトンの詩に着目されました。シュルレアリスム創始者ブルトンの専門家として、多くの論文を執筆されています。詩における「匿名性」や「共同制作」についてのご論考、ブルトンの「イマージュ」を「聴覚的な言葉の流れ、連鎖」と捉えその果たす詩的役割を分析するご論考、詩的方法論である「自動記述」を「言葉の自動的（自律的）な連鎖」と考え解明するご論考など、詩の特性を研究されてきました。2015年に出版された『アンドレ・ブルトンの詩的世界』は、30年にわたるご研究の集大成となり、福澤賞を受賞されています。

長きにわたって法学部を牽引しながら、研究にも邁進され、詩人としても活躍される朝吹先生は、同僚の誰からも尊敬されています。先生から教える学生たちがいかに恵まれているかは言うまでもありません。最後に『水火』に掲載された詩「雨」を引用させていただきます。メールボックスに『水火』が届くたびに、矛盾する表現かもしれませんが、胸をわくわくさせられるとともに心の平静も得ることができました。「雨」では、とても沈んでいたとき、ふっと浮かびあがることができた、そんなことを覚えております。

雨がふる／雨がふって／モクレンの葉が／あざやかに／直立する  
雨がふって／にげまどうひとたち／それでも／ゆうぜんと／歩くひとたち  
雨は／ひとときだけ／わきたつ植物の匂いを／しづめる／  
だれのものだらう／視点だけ／うえへうえへのぼって行って／  
雨が／ふって／ひとびとと／すべての事物を／濡らす

朝吹先生のこれまでのご貢献に深く感謝いたします。そして、今後さらに多くの詩をご執筆なさいますことを心より願っております。

2018年2月

法学部日吉主任 奥田暁代